

## 学術研究集会傍聴記

スポーツ健康科学におけるグローバル化～アメリカでの具体例

篠原 稔先生

Georgia Institute of Technology

順天堂大学スポーツ健康科学部

橋詰 賢

2013年12月14日(土)、順天堂大学さくらキャンパスにおいて、学術研究集会が開催された。Georgia Institute of Technologyより篠原稔先生をお迎えし、「スポーツ健康科学におけるグローバル化～アメリカでの具体例」というタイトルにてご講演をいただいた。昨今、多くのフィールドで”グローバル化”という言葉を目にする機会も多く、大学等のアカデミックなフィールドではグローバル化を組織の付加価値として挙げるところも少なくない。スポーツ科学や健康科学といった学術領域において、早期よりグローバルなフィールドで研究活動に取り組まれてきた篠原氏のアメリカでの経験を実例とし、グローバル化をどのように考えていくべきかという内容をメインに話が進められ、後半は篠原氏の最近の研究内容について、また運動指導のグローバル化についてプレゼンテーションが行われた。グローバル化についての内容は研究トピックに関わらず、私を含め若手の研究者にとって貴重な内容と考えられるため、本傍聴記では講演内容の前半部分に焦点を当てて話を進めたい。

まずは自分自身をグローバル化するに当たり、必要不可欠な要素であるコミュニケーションについて説明が行われた。グローバルスタンダードな言語である英語を母国語としない日本人にとって、英語を用いたコミュニケーションというものが大きな障害の一つとなっていることは日本人のみならず、外国人の多くもまた、同様に認識していることである。筆者も国際学会参加や国際誌への論文作成の際など、この点について痛感する機会が少なくない。この障害を認識した上で、言語の問題の有無に関わらず、そもそも他者とコミュニケーションを行う目的を考えてみると、他者との会話そのものが目的ではなく、響き合うことが目的とのことである。従って、コミュニケーションの相手に響き合いたいと思ってもらう必要があり、そのためには響き合いたいと思わせる何かを、自分が持っている必要があると説明された(写真1)。言語はコミュニケーションを行うためのツールにすぎず、何よりも相手が自分に対して響き合いたいと思ってもらうための自分磨きを優先して行わなければならないと導かれた。研究というフィールドで考えると、他の研究者が響き合いたいと思えるようなオリジナリティの高い研究成果をアウトプットすること、またその研究成果をアウトプットするための方法論開発や知識の獲得といったものが挙げられるだろうか。

続いては自分磨きについて、アメリカ式の研究者のためのトレーニングを例に説明が行われた。同トレーニング内容として1) ディスカッションの仕方、2) 研究費申請の仕方、3) 科学論文の書き方、4) アメリカ式教育の仕方の4項目が挙げられていた。アメリカでの研究費申請および論文作成は原則、仮説検証型であり、そのためミーティング等のディスカッションでも論理性が強く求められるとのことであった。篠原氏はRoger Enoka氏(Colorado University)やVladimir Zatsiorsky氏(Pennsylvania State University)といった著名な研究者のもとでこれらのトレーニングを受けられたことは幸運だったと話されていた。また中でも印象に残ったものとして、アメリカでの研究費の申請では、論文の数倍にもおよぶはるかに多くの文章量を書く必要があるという点を挙げたい。申請書には論文には書ききれない内容の記述まで求められるとのことで、申請書の作成には多くの労力と時間を割く必要があるとのことである。一方、申請書を提出した段階で論文に記述されるべき内容の多くは文章化されているため、論文作成は申請書と比較して労力、時間ともにはるかに少な

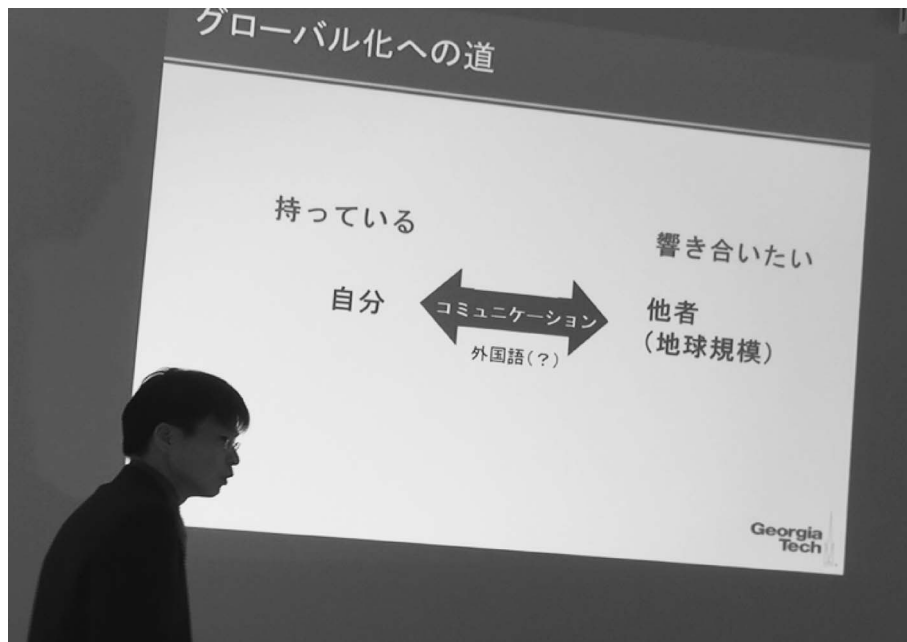


写真1 講演中の篠原氏

く済むようである。筆者は科学研究費（若手B）の申請書を1回、また類似した書式として日本学術振興会特別研究員の申請書（DC1, DC2, PD）を4回程度の申請書作成経験しかないが、両者とも論文の数倍までの文章量は要求されていないように記憶している。また筆者の知る限りの民間の研究費申請については2-3ページ程度のものも多く、科学研究費の申請と比較してもはるかに少ない文章量である。もちろん日本における科学研究費、民間の研究費申請書は両者ともに日本語で作成される。よって日本人が研究費を申請した内容にて国際誌への論文を作成する場合は、日本語で書いた文章を英語で書き直すという二度手間が発生する。研究というフィールドにおけるグローバル化としては、国際誌への論文投稿は必須と考えられることから、日本における研究費申請も英語で行うべきではないかと篠原氏は提案されていた。もちろん日本人にとっては大きな生みの苦しみとなるだろうが、それに伴い、国際誌への論文投稿が増加すれば、海外の研究者に認知される機会も増えると考えられる。これもまた、海外の研究者に響き合いたいと感じてもらうための自分磨きとなるだろう。

次いで説明されたのはコミュニケーションのゴールについてである。何らかの目的を持たないコミュニケーションは単なるおしゃべりに過ぎず、目的を持ち、その目的が達成されるコミュニケーションが取られる必要があるとのことである。そして自分に対して、誰かが目的を持ったコミュニケーションを取りたいと思ってもらうためには、相手のコミュニケーションの目的に対して、何らかの貢献が出来る能力や技術を自分自身が身に着けている必要がある。つまり、自分が磨かれているか否かによって、目的を持ったコミュニケーションの成否を決定することとなる。英語を苦手とする日本人におけるグローバル化とは、この段階まで考えられたコミュニケーションを実施する必要があるとのことであった。この点について、筆者がこれまでに参加した国際学会や海外での学术交流等の経験でも理解できるものであった。通常、口頭、ポスターに関わらず研究発表では、同時刻に複数の発表が行われる。よってある発表を聞きに来ている学会参加者は、その発表に対し、絶対的もしくは同時刻に行われている他の発表と比較して相対的に興味を持っていることとなる。さらに発表内容について質問が行われた場合、質問者は他の参加者と比較して、発表内容についてより強く興味を持っていると考えられる。そのような場合、例えば筆者のつたない英語であっても、会話を繰り返し、時間をかけてコミュニケーションを取ろうとしてくれる場合も少なくない。一方、バンケットや懇親会では、簡単なあいさつの後に間が持たな



写真2 懇親会会場の様子

くなることもまた、しばしば起こることである。これはまさにコミュニケーションの目的の有無に起因することではないだろうか。

講演終了後は、会場にて懇親会が催された。立食形式だったことが奏功し、筆者を含めた多くの参加者が篠原氏と”コミュニケーション”を取ることが出来ていたのではないかと思う(写真2)。この場で印象に残った篠原氏の言葉として、得たいものがあるのならば、それに伴い失うものもあり、両者を天秤にかけて常に選択をしているというものを挙げたい。海外での研究生生活を得たいものとしたとき、現時点での国内での研究生生活や収入等を捨てなければならない。つまり海外での研究生生活を得たいと考えているにも関わらず、一步踏み出すに至らないということは、失うものとの比較を行った結果として、現状維持を選択していることになるという内容であった。この話について、筆者自身も思うところもあった。講演そのものに加え、篠原氏とのコミュニケーションの機会が得られた懇親会でも非常に有意義な時間を過ごすことが出来、国際的な研究活動について大いにモチベーションを刺激された。興味深くまた刺激的な講演を行っていただいた篠原氏、および今回の世話人として開催に尽力された柳谷登志雄氏(順天堂大学)に感謝の意を述べ、本傍聴記の結びとしたい。

## 学術研究集会傍聴記

10 year at Edith Cowan University—Challenges and Achievements

野坂和則教授

Edith Cowan University

順天堂大学大学院 スポーツ健康科学研究科  
博士後期課程2年 北田 友治

野坂和則先生は、伸張性（eccentric）収縮によって生じる遅発性筋肉痛や筋損傷に関するテーマで長年研究を活発に行われていらっしゃる国際的な研究者である。今回は、オーストラリアのEdith Cowan大学でお勤めになられて10周年を迎えられたということで、その10周年を振り返りながら我々にその中で得られた研究成果の一部やオーストラリアと日本の大学や研究環境の違いについてご紹介頂いた。

今回の学術研究集会で私が特に興味深かったことは、伸張性収縮による運動効果に関することである。数年前の流れでは、筋肉痛の大きさが筋肥大の大きさに直接反映しないことから、動作に支障をきたす筋肉痛を生じさせる伸張性収縮運動の効果について疑問視する声もあったと思う。しかし、野坂先生のご講演を聴く中でその流れが一変するかもしれないと感じた研究がある。それは、糖尿病患者に対する運動では、伸張性収縮運動が短縮性運動よりも改善率が高いことを示したもので、伸張性収縮運動の新たな利点を示した研究であった。そのほか、同じ運動量に対して、生理的および主観的な運動強度や代謝的な負担においても伸張性収縮運動の方が短縮性収縮運動よりも少ないことが明らかになってきており、今後は、身体活動が十分にできない高齢者や代謝性疾患患者にとって伸張性収縮運動の重要性が増すことが予想できる。これまでは、代謝性疾患患者に伸張性収縮を伴う運動は懸念されてきたように思うが、一般常識が変わる日も近いかもしれないと思えた。今回、世界的に活躍されている研究者の講演を聴く機会に恵まれ、私自身の研究デザインを考える上でも有益な情報が得ることができ、大変有意義な講演であった。

## 学術研究集会傍聴記

10 year at Edith Cowan University—Challenges and Achievements

野坂和則教授

Edith Cowan University

順天堂大学大学院 スポーツ健康科学研究科  
博士後期課程1年 鄧 鵬宇

今回の学術研究集会は、平成26年1月16日、順天堂大学さくらキャンパスで開催されました。今回は、Edith Cowan Universityの野坂和則教授による筋疲労や加齢を科学する講演に参加させていただきました。

野坂先生は講演の中で、加齢によって変化する炎症性因子の血中動態がサルコペニア発症と密接に関わっていること、さらに、それら炎症性因子が運動（トレーニング）によって影響を受けることを強調されました。近年、先進国のみならず、発展途上国では、本格的な高齢社会を迎えており、ゆとりと豊かさに満ちた社会を実現するために、高齢になっても自由で自立した生活を営めることがガギとなっていることから、介護・寝たきり予防の介入方法を開発する上での貴重なデータであると思えました。また、野坂先生がオーストラリアに渡られた経緯や日本とオーストラリアの生活様式や大学制度の違いについても講演されました。これから日本で学びを深めていく私にとって、野坂先生の研究に対する考え方や姿勢を知ることができ、また中国や日本だけでなくオーストラリアの大学制度や研究環境を知ることができたことは、とても有意義な時間となりました。

## 学術研究集会傍聴記

10 year at Edith Cowan University—Challenges and Achievements

野坂和則教授

Edith Cowan University

順天堂大学大学院 スポーツ健康科学研究科  
博士後期課程2年 石原 美彦

今回の学術研究集会は、Edith Cowan Universityの野坂和則先生にご講演頂いた。野坂先生と言えば、遅発性筋痛、エキセントリック収縮をテーマに世界的にご活躍されている研究者で有名である。私自身、野坂先生のご講演に参加したのは、修士のときに本学でご講演頂いて以来2回目であった。前回の篠原稔先生（ジョージア工科大）と同様、世界的に活躍されている日本人研究者の講演を聴く機会に恵まれ、私自身の今後の研究活動および研究生活を考える上でも有益な情報を得ることができる大変有意義な講演であった。野坂先生の研究活動に関するお話はさることながら、オーストラリアEdith Cowan Universityに移った経緯や日本とオーストラリアの生活環境・様式、あるいは大学制度の違いや研究費獲得の難しさについてもお話し頂き、後期課程で研究をしている者として大変刺激を受けた。特に、研究費を獲得するために医学的分野との密接な関係が必要であり、獲得のための戦略について試行錯誤を繰り返していると述べており、オーストラリアにおいてスポーツ科学分野が研究費を獲得する難しさを強調されていた。同様のことは篠原先生も述べられており、海外で活躍する研究者の苦悩なども聞くことができたのも刺激的であった。今後もこのような集会を多く開催して頂きたいと思うとともに、積極的に参加していきたい。

## 学術研究集会傍聴記

10 year at Edith Cowan University—Challenges and Achievements

野坂和則教授

Edith Cowan University

順天堂大学大学院 スポーツ健康科学研究科  
博士後期課程2年 棗 寿喜

今回、Edith Cowan Universityの野坂和則教授のご講演を拝聴する機会に恵まれた。

ご講演の始めに、オーストラリアでの生活について冗談を交えながら楽しく話をしていただいた。オーストラリアでは休暇を規定の日数取ることや大学での勤務時間が決められており、日本の大学に勤務している教員と比較すると仕事とプライベートにメリハリを持つ必要があるということだった。限られた時間を有効に活用し研究成果を挙げることは、今後私にとっても必要になってくることだけにとっても参考になる内容であった。引き続き、オーストラリア国内で研究費を獲得するコツについてお話をされた。オーストラリアでは国が重点的に研究を推進するテーマがいくつか設けられており、多額の研究費を獲得するためにはそのテーマに合致している必要がある。従って、現在自分が取り組んでいる研究テーマを重点的研究テーマとすりあわせるかが重要なポイントであるということでした。海外で研究職につき、ご活躍されている先生のお話は非常に新鮮であった。

私も研究者を志す者のひとりとして、自分たちの研究を通して社会貢献するとともに、今後とも自己研鑽に励みたいと改めて思えるご講演であった。今後もこのような講演会を多く開催して頂きたいと願う。